



山々亭有人編集

一冊芳虎画

誠忠
義士
烈女銘々傳

天永堂壽

柳田文庫

文庫11

A1749

10

15

20

25

30

文庫11

A1749

忠
義
士

義士

烈

女

銀

傳

山

山



98-7972

忠義

雙言と漫言の難や越の勾踐の薪の卧晋の豫讓の山を
呑の如く千辛万勞して古節と盡小わくど争小懐と
赴ん良雄等此難さを做得と以て武勇の年裁の
長武門の準則と故ふ其徳を賞し其傳を奉り
百車小餘り肝牛小盡と此史の同盟の士小御る所の女儀
松柏の時雨小色と變りて身と鷲毛の怪小比し緯と泰山の
重き小謀る類と輯義士列女傳と号ぬ宵露の上小歌能
と加ゆら彼何々百首とら者小集はる蓋耳目と善とるの
戲作物語小のこれハ讀得く佳競小入る并

慶應四國 辰春高成
同 己春新鐫

中亭有人記



同七

儀士等本意と
 遠く兩國と
 渡らんると時
 直敵の士の
 壹人はと遮止
 解小聖と久
 某一諸士と制
 一人大と
 廻りとえ

間十治郎



吉田左衛門

大石主税

大石良雄

竹林唯七



列女口ノ一



志んぼの...
 情はぬらひ...
 但子あま...
 と賣子と...
 こげさせ...
 のごまの...
 好細...
 音せ...
 ...



京師...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...

...
 ...
 ...
 ...
 ...

列女口三



良難に下りて同盟の十年二月以前
 儀士の為小其奥を金銀客場から
 ありて金銀の出入りもよくしり
 寺の金銀の出入りもよくしり
 儀士の為小其奥を金銀客場から
 ありて金銀の出入りもよくしり
 寺の金銀の出入りもよくしり

儀士の本意と違ひて泉岳寺
 小坂の境内に助書院を築
 吉右衛門の御出立の形を
 同盟の御出立の形を
 同盟の御出立の形を



列女口

委質

六十歳

忠直老

益強黄

未足寶

片猪換

美奩

平家子題



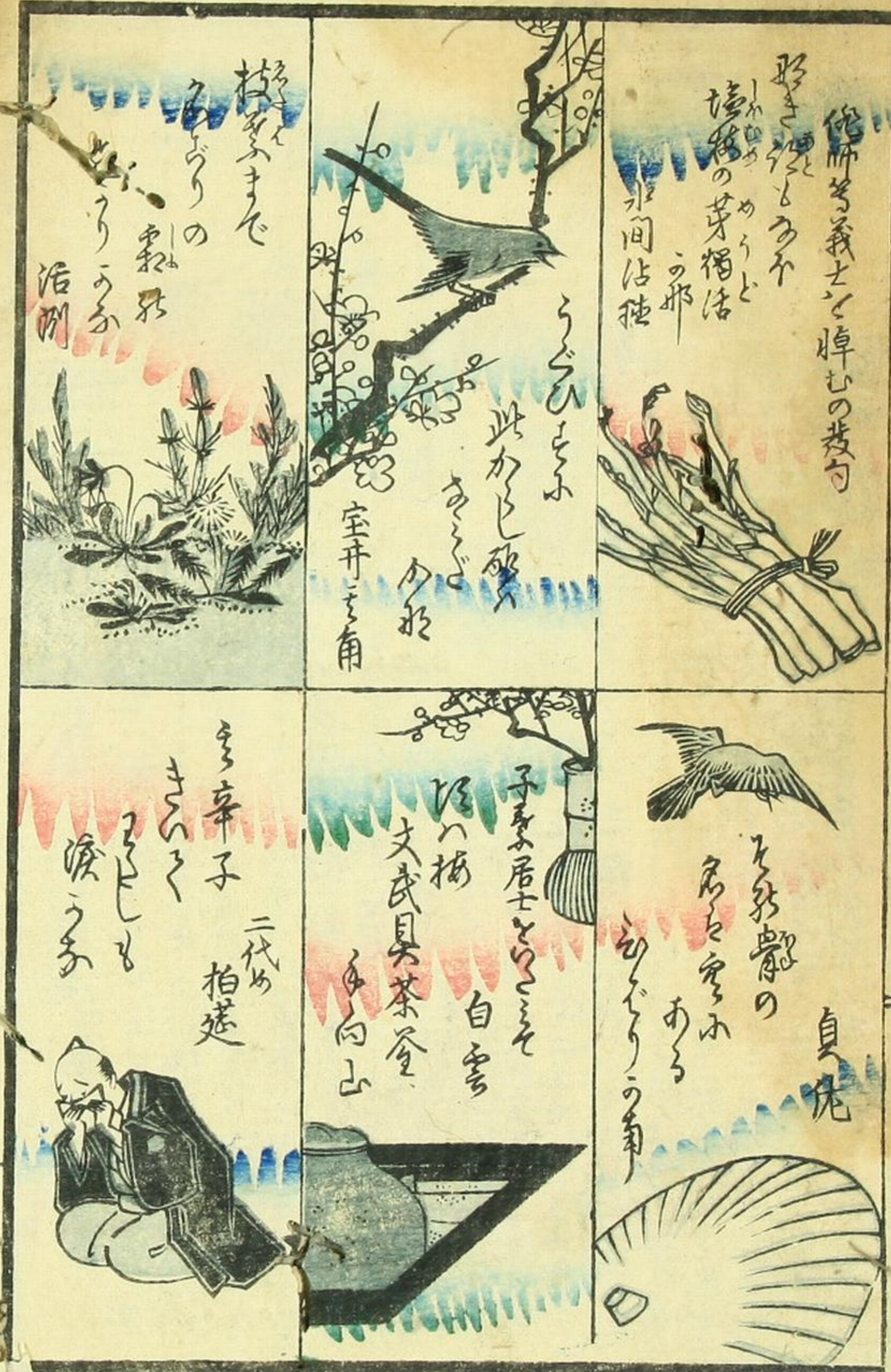
肉... 助... 情... 途... 若... 舟... 積... 中... 登... 小... 大... 傍... 去...

列た



大野... 福... 貴... 義... 渠... 是... 予... 竟...

内面... 折家... 鏡... 面... 金... 小... 上... 泉... 首... 骨...



列女...

此女房の死 此女房の死 此女房の死 此女房の死
 お静の死 此女房の死 此女房の死 此女房の死
 お静の死 此女房の死 此女房の死 此女房の死
 お静の死 此女房の死 此女房の死 此女房の死
 お静の死 此女房の死 此女房の死 此女房の死
 お静の死 此女房の死 此女房の死 此女房の死
 お静の死 此女房の死 此女房の死 此女房の死
 お静の死 此女房の死 此女房の死 此女房の死
 お静の死 此女房の死 此女房の死 此女房の死
 お静の死 此女房の死 此女房の死 此女房の死



列女ノ...

金環の妻 此女房の死 此女房の死 此女房の死
 お静の死 此女房の死 此女房の死 此女房の死
 お静の死 此女房の死 此女房の死 此女房の死
 お静の死 此女房の死 此女房の死 此女房の死
 お静の死 此女房の死 此女房の死 此女房の死
 お静の死 此女房の死 此女房の死 此女房の死
 お静の死 此女房の死 此女房の死 此女房の死
 お静の死 此女房の死 此女房の死 此女房の死
 お静の死 此女房の死 此女房の死 此女房の死
 お静の死 此女房の死 此女房の死 此女房の死



此女房の死...

山田屋三郎が娘を海と
 つりかきしりいぬれまれ
 給ひいまこきつるのふれを
 俣おとさる小主家選持お
 しばい父母の京師おのうて
 終中父後居お死せし
 三平を妻と云あせ山田お
 取つては戸下向とわいお
 めりしとらけてはたふ
 母がおとより七喜良お
 育てし一もとよりお
 あるとけて左邊お思これ
 音お紅世そ大才の夏とい
 とも彼のいづて子五郎お告
 付八の夜も目おしき離ら
 るせ一が激破操おちりて
 自害せ一とて死せると死
 十八歳おまごらるいおとえ

いふとちやま
 十おををとせりお
 けりうう
 石を
 伸う
 んら



この無名氏
 主税が墓前江
 手向くるうり

大石を税云長垂又

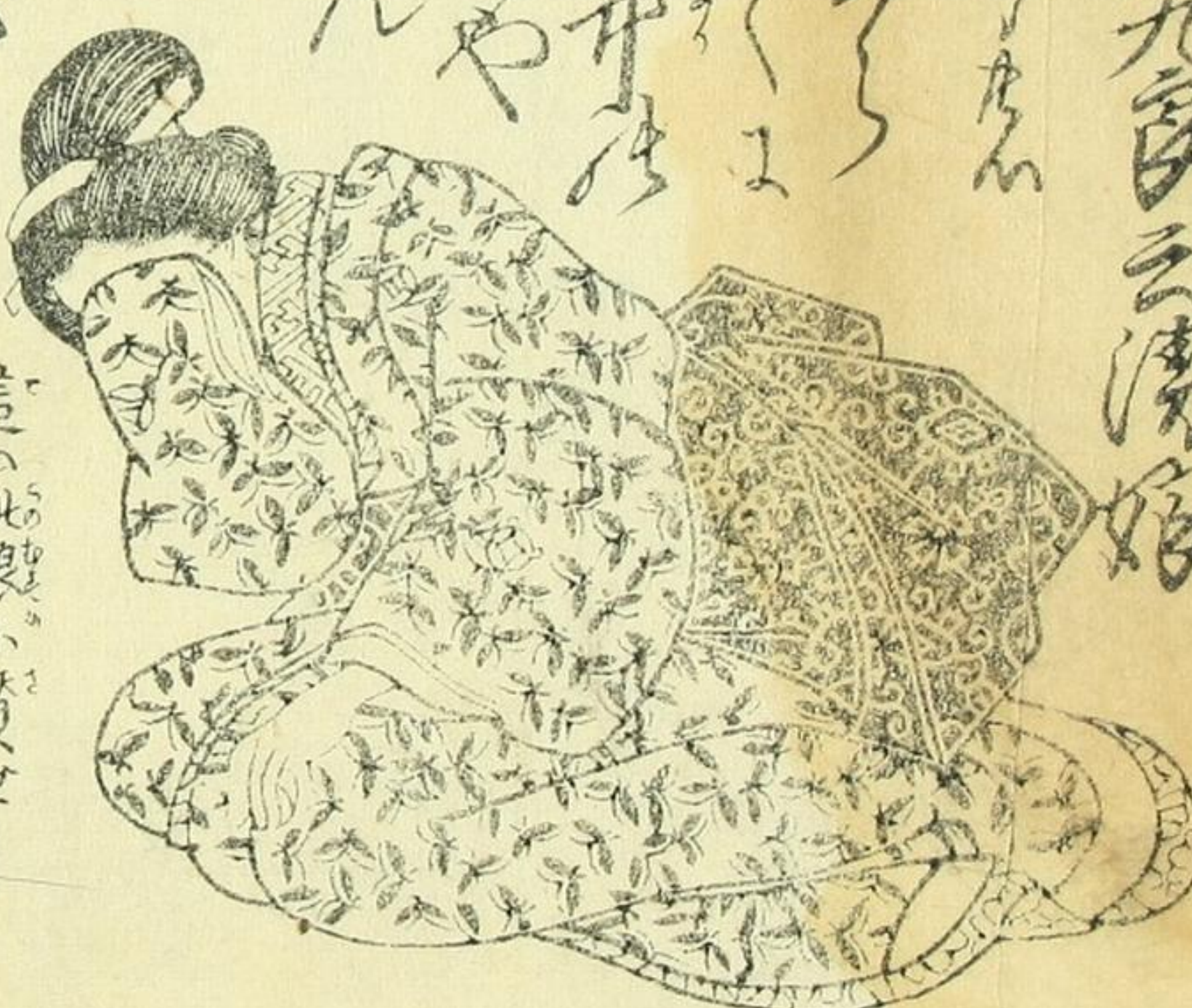
名をよとつりあまおの
 おおあつりしと國家の
 後おあつておとさる
 武林の妻と云あせし
 りお一もとよりお
 それよりおあつて
 遠の志性を操さんお
 や密事をやひるお
 松野神おさあつて
 けりし夜いおねお
 けりしとあつりお
 忠石清江戸4向の時
 産埋おあつてお

吉田屋三郎の娘
 我ごう
 穂の
 ちの系
 友士の
 らやそら
 からあ



九節の... 提浦... 三人... 義の... 提浦... 一生...

大御九良三清娘
 砂の中...
 黄金...
 心...
 這の此娘不贅せ
 さうらーの狂泳り



助右... 正周... 母... 越... 意... 生... 母... 女... 正周... 助右...

富森助右清門
 正周の母
 正周の母
 正周の母



十平治のそひ小梅人との心とて
 無法なる世にありし縁忠の
 士之門を助けしゆりしこと
 江戸中肉の村十平治保子出
 るにそのと母金三十五とて
 老母の身とてつげたり
 のはじと命じし十平治母は
 中とつとてはあはれに涙を
 流し夜を夜とてお果し
 書 並の十平
 此の夜を夜とてお果し
 事の法をいふは女もあはれ
 一六つとて内を助後
 思ひの心はあはれ
 大の心をあはれ
 子母もあはれ

十平治が母
 横川助平伯母
 流るる
 泣く
 涙



列女ノ十五
 十平治が母

十平治のそひ小梅人との心とて
 無法なる世にありし縁忠の
 士之門を助けしゆりしこと
 江戸中肉の村十平治保子出
 るにそのと母金三十五とて
 老母の身とてつげたり
 のはじと命じし十平治母は
 中とつとてはあはれに涙を
 流し夜を夜とてお果し
 書 並の十平
 此の夜を夜とてお果し
 事の法をいふは女もあはれ
 一六つとて内を助後
 思ひの心はあはれ
 大の心をあはれ
 子母もあはれ

十平治が母
 横川助平伯母
 流るる
 泣く
 涙



列女ノ十五
 十平治が母

備兵衛が妻の行田原若者
 婿ありて是を尋ねて同郷の
 人ありしに其母は死に去
 せしに妻は悲憤を以て山科
 子に白紙の書を送りて其
 子に命を託すなり此歌の
 吉良家は奉茶をして茶の
 内刺を授けては奥の室に
 去らせり義士は其のつりの
 州の山科の村にありしに
 良維大の書を一冊おろ
 せしに其母は死に去
 せしに妻は悲憤を以て山科
 子に白紙の書を送りて其
 子に命を託すなり此歌の
 吉良家は奉茶をして茶の
 内刺を授けては奥の室に
 去らせり義士は其のつりの
 州の山科の村にありしに
 良維大の書を一冊おろ
 せしに其母は死に去
 せしに妻は悲憤を以て山科
 子に白紙の書を送りて其
 子に命を託すなり此歌の
 吉良家は奉茶をして茶の
 内刺を授けては奥の室に
 去らせり義士は其のつりの
 州の山科の村にありしに
 良維大の書を一冊おろ



列女ノ十六

大高源吾左衛門の嫁年十九
 ありて其母は死に去
 せしに妻は悲憤を以て山科
 子に白紙の書を送りて其
 子に命を託すなり此歌の
 吉良家は奉茶をして茶の
 内刺を授けては奥の室に
 去らせり義士は其のつりの
 州の山科の村にありしに
 良維大の書を一冊おろ
 せしに其母は死に去
 せしに妻は悲憤を以て山科
 子に白紙の書を送りて其
 子に命を託すなり此歌の
 吉良家は奉茶をして茶の
 内刺を授けては奥の室に
 去らせり義士は其のつりの
 州の山科の村にありしに
 良維大の書を一冊おろ



村松三之丞夫妻

武林唯七妻
 三十年來一愛
 中
 撫生
 取
 我第人曰
 家鄉卧病雙親
 在膝上奉歡恨不終



列女ノ十七

武林唯七妻
 三十年來一愛
 中
 撫生
 取
 我第人曰
 家鄉卧病雙親
 在膝上奉歡恨不終



武林唯七妻
 三十年來一愛
 中
 撫生
 取
 我第人曰
 家鄉卧病雙親
 在膝上奉歡恨不終

京師總司の故女より
 練舞の濃き女の太鼓を
 練まうと欲す故の風流を
 歌もく舞もあまを
 うゆふおどりしを
 いそぎ向と極まりし時この
 士とわたりし羽を
 折さずくおけりしを
 其の男もそらろ小神をひこ
 して羽をのちりしを
 号後仇の後翌年の春を
 遊ふと欲しはかろも
 歌もあまを
 をそらろの系ふくちを
 のゆかりをむきびわとこ
 芳流をとりしを
 玉と極まりしをあらば



故女
 花
 藤

京師の
 世と同
 姿をせめ
 形えともえ

列女
 千六
 芳流

大正の故女より
 て一子を後く九十
 号は良人金を
 を助て世流三百
 そひて羽流の系
 の也も病ひの系
 は女流の系
 振る舞の系
 女流の系
 との系
 肉親の系
 わらぬ系
 と金不系
 のらぬ系



京師の
 世と同
 姿をせめ
 形えともえ

京師の
 世と同
 姿をせめ
 形えともえ

義経正久の遺愛ありて容姿
 閑雅の中より男の姿を帯びて
 更なり妓女を道小格にされ
 自ら義経の遺愛の正久の母
 親として幕府の申渡りするも
 らば見がたしやその家の愛
 かりて悲憤小格を帯びて
 義経の母を侍りて母が侍り
 義経の母を侍りて母が侍り
 義経の母を侍りて母が侍り
 義経の母を侍りて母が侍り



義経四家の屋敷に死す場にて
 尸の敷を寺の華に託す
 四五日経ていよいよ夜も明くる
 翌年くつら身が婦人三才の
 里の寺に託す
 正久が奉給の愛の正久の母
 親の母を侍りて母が侍り
 義経の母を侍りて母が侍り
 義経の母を侍りて母が侍り
 義経の母を侍りて母が侍り



秘引三茶寺阿... 門の... 湯の... 道... 林... と... 至... 由... 伊... さ... 門... ち... ち... 後... 世...



内巻助の妻
 今更に
 可成り
 らねを
 常
 生
 年の
 くれお

列女ノ廿三

鐘... 秋... 小... 倫... 家... 見... 今... 今... 今... 今...



今更に
 可成り
 らねを
 常
 生
 年の
 くれお

伏見娘女ノ芳

老與が妻の遺骸を杖とて
 の後より妻を遺骸とて杖とて
 難くはしむる所ありけり
 此の事もまたおまへ人の
 こととていふ事ありけり
 此の事もまたおまへ人の
 こととていふ事ありけり
 此の事もまたおまへ人の
 こととていふ事ありけり



此の事もまたおまへ人の
 こととていふ事ありけり
 此の事もまたおまへ人の
 こととていふ事ありけり
 此の事もまたおまへ人の
 こととていふ事ありけり

一 朝 一 花
 内藏之助母儀
 難開
 眉思郷
 的賜不待夕
 遠ハ良難解世の
 一ウツリ會首座ガ
 許ハ送る
 書中

大石良雄妻の肖像
 大石良雄は、徳川幕府の重臣で、大石内蔵助の父である。妻の肖像は、寛政11年（1799）に刊行された『浮城物語』に描かれている。この肖像は、大石良雄の肖像の隣りに描かれている。



列女伝

輯者

山々亭有人

肖像

一孟齋芳虎

赤城義士銘々實録

山々亭有人録
一孟齋芳虎画

この本は、赤城義士の事蹟を記したものである。赤城義士は、徳川幕府の重臣で、大石内蔵助の父である。この本は、赤城義士の事蹟を記したものである。

誠忠まこと 列女れつにょ 銘々傳めいめいでん

二編近刻

手紙案文獨體古

泛釋用文

遠く一筆書上のふけとえ
しめ文申名目の文字
婦初のふけに分るるを
文事多しことなきん
を重宝のたまひ

葛師為秋画

以是收之繪本冠附

初海出集二編近刻

森羅万象といふは
有たるとる
おのこく画と
名を有蓋の使といふ

東都

書物

問屋

須原	山城	小林	山田	桐田	和泉	播磨	丁磨	森子	山口	大島
屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋	屋
茂兵衛	佐兵衛	新兵衛	政吉	嘉七	市兵衛	勝五郎	平兵衛	治兵衛	藤兵衛	傳兵衛

010190531533

